

拜神瞑目して~~光~~を認むるは
神命にして、其の位置と数と明
と暗と滅と色彩と形状等とは、
直に其の説明を與へたまへるも
のなり。

座を回りにて多数の~~ヒ~~あるを
認めたるものは、赫々の火にし
て聖無動尊の加護顯著なるを示
し、高く一点の~~火~~を拜するも
のは、光明世界に住すること
を教へ~~目~~たらざる一閃の火に
八握劍にして、全身~~人~~に坐す
る時は白玉身を悟證し得たる曉
なり。
アアヒガテンジンユウアイコ
ウとは称へまつるなり。

以上のような「神命」を得る
ためのゴトクマ。

アチメアチメオオオオオオ
オオオオオ。

アチメオオオオ。

アチメアウヲ。

アアヒガテカジンユウアイコ

ウ。

ウトノミヤシロ。

ウトノカミミヤ。

ウトノミヤ

ウト。

ウ。

ア。

ハ。

ヒ。

フ。

ク。

フルベユラユラトヲフルベ。

ユツツマグシ。

ウ。

ヤシマジヌミ。

イウヲ。

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウ。

なお、検討を要する。

ウ。

ク。

ヒ。

アチメ。

ヨシ。

ヒフハ。

心して我は行かなん朝夕に

神の心を心とはして。

置く露を掃ひては行け朝毎に

道の長途の長き旅路ぞ。

ウ。

アアヒガテンジンユウアイコ

フハヒフヘホ。

秘徳の説明

状況

→

その意味内容

拝神瞑目して光を認める。

何らかの神命である。

① 座を回りて多数の^{めい}一^しが
あるように見える時は、

聖無動尊の加護が顕著
であることを示している。

② 高く一^し点の光を拝している
ように見える時は

(その人の意識が、今すでに)
光明世界にあることを教えている。

③ 日なりぎる一^し閃の光^ヒが
見える時は、

八握剣の作用力が
(今ここに来ていることを示し)

④ 全身が^ヒ零の中に座している
ように感じる時は、

白玉身(直日)と悟證した
境であることを示している。

おおよそ、順序は①→②→③→④の順であり

この④直日の悟證^{ナホヒ}に至るためのコトワガ、十四字秘言である。

同じ十四字をさらに唱え続けることで、

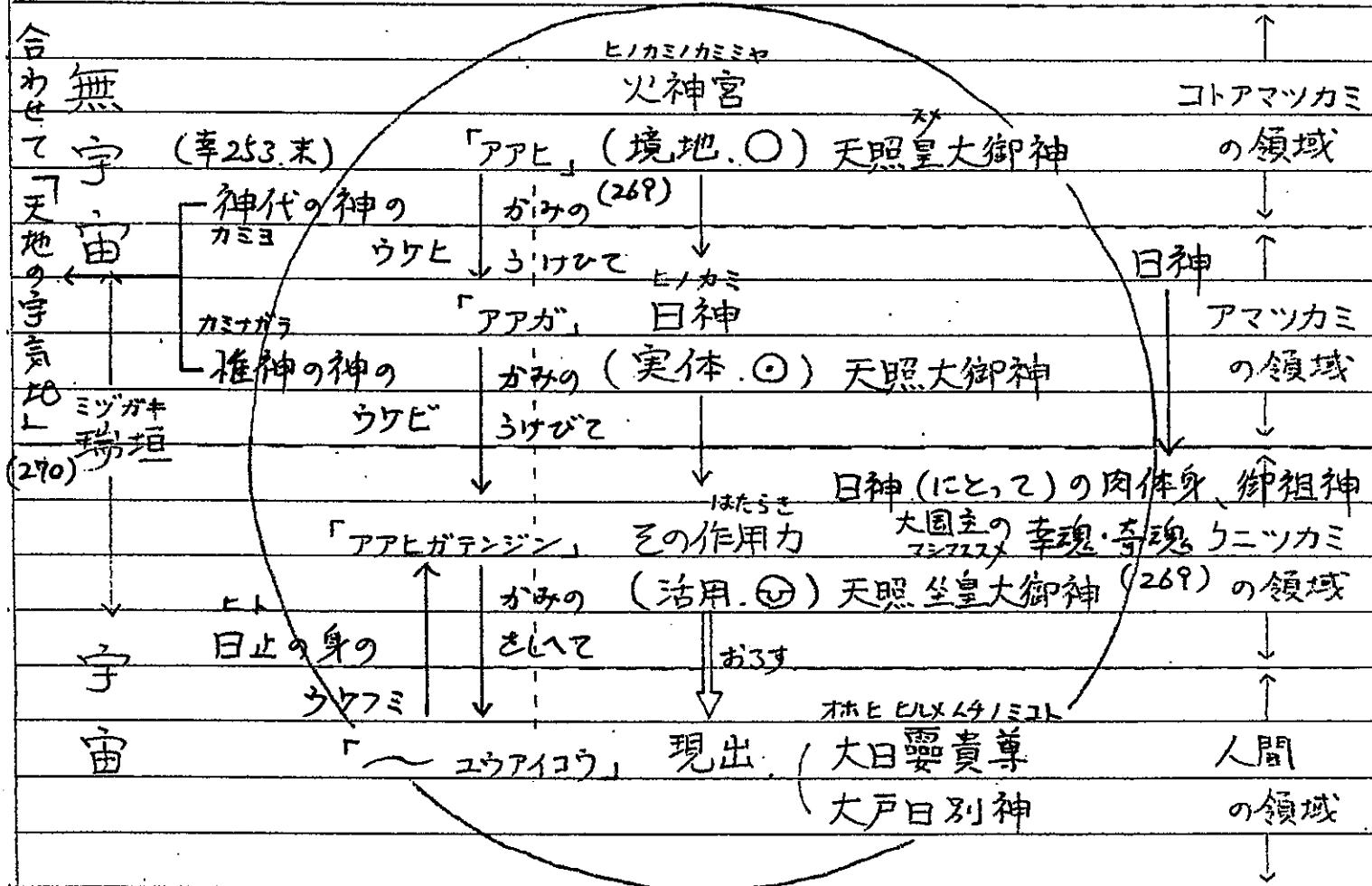
直日の作用力は全身魂^{ナホヒ}に行き渡り^{ミツマ}

その人は「この身このまま神と化^カる」のである。

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
日神の作用力は 最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
ヒノカミ はたさき



大正人道教主人

多田山公台秘稿

大正人道教主人とは直日にして、國家にありては國主なり、國土なり、國言なりにてましますなれば、家庭に於ける戸主なるべく、組合に於ては組合長にして、會社にありては社長なり、會長なりにして、世界人類としては釋迦なり、基督なり、天照大御伴なり、天帝なりにてましますなり。

其の故は、生死遷流しつつ生死遷流を知らざるが故にして、天命なり、美固止（みこと）なればにして、大宇大宙のその相（すがた）なり、その事理なるなり。

然れども、人の身は監護として限られたる世界に生活するが故に、其の身の来由を知らず、往路を辨ぜずして、信體に執着し、見聞し得る範圍に於て目的標準を定めんとするなり。

於此か、所謂、偶像を目標と

召田志づき

せざれば確實感を得難くして、人爲の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。
佛像佛画の本尊と稱し、神像と稱するものと共に、天皇と稱するも亦然るなり。
大正人道教主人とは神直日なり。

大極にして、無極にして、無極にして、如是なり。
メにして、ヒにして、フにして、ヒメにして、ヒコにして、ハルヒヒメにして、三三三にして、十種にして、三種にして、一二三四五六七八九十百千萬にして、零なり。
之れを人天萬類の基準となすなり。
否、「基準なり」と知るなり。
ヒフミヨイムナヤコゴノタリヤモモチチミテリ。
アアヒガテンジンユウアイコウ。

今日今時人不我
風塵掩望日
虛名徒壽外
三年不鳴
鵬雛情

山多田雄三先生筆蹟

人天萬類の基準が零であること
正しく知るためのコトヲマ。

これを知り、これを基準として、自分の直日を見つけ直すことが、
即ち、直日の強化となり、直日の人となることにつながるのである。

伊勢大神宮に於かせられてすら「阿知米」^{アチメ}の祕曲を奏しまつらざること年久しきに渡らせ給へるなりと。明治天皇の勅諭に依りて、その古に復させ給へるは、畏しとも畏き極みである。

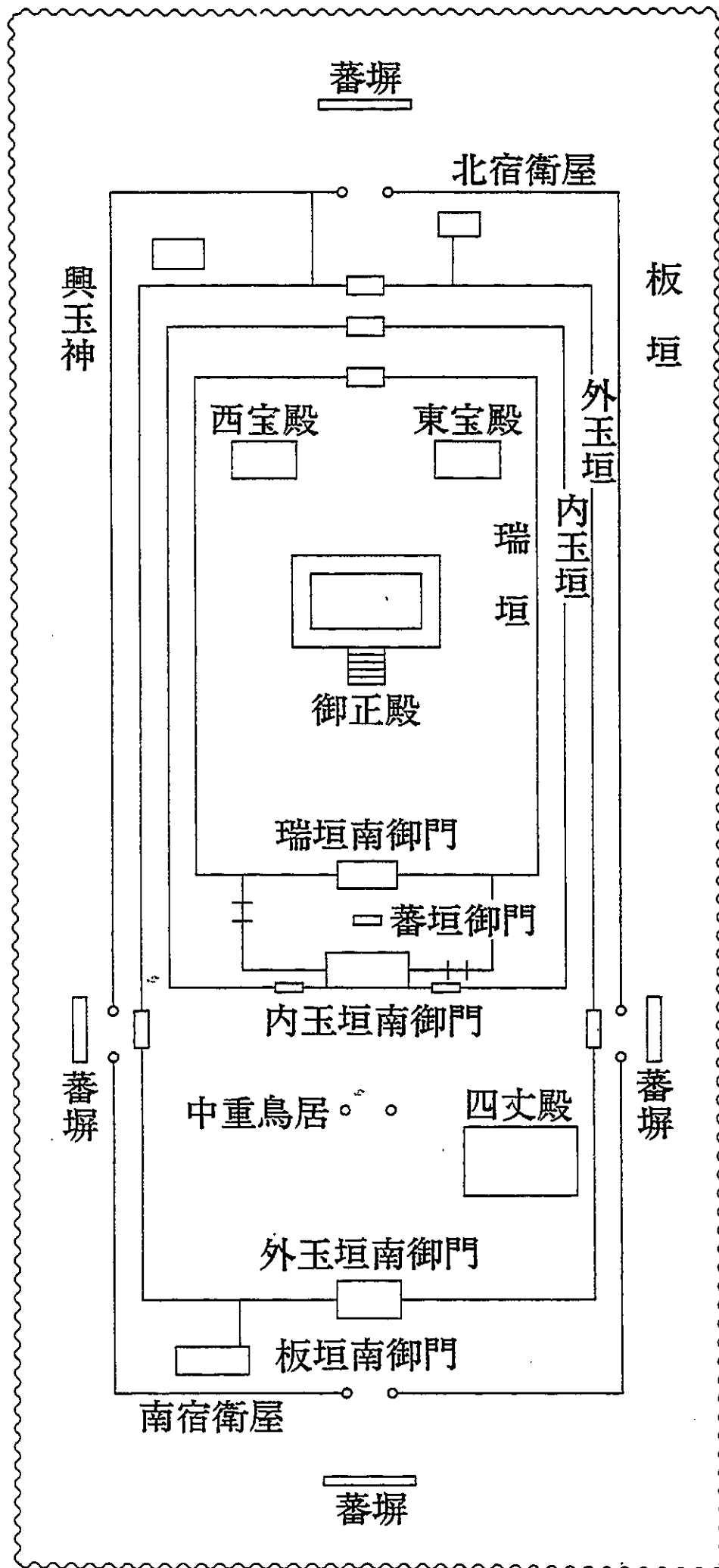
さくくしろ、五十鈴の宮居。御祖神、日の大御神。かみながら、神のそこ宮。神杉の、おくが深くも。瑞垣の、内外遠くも。天地の、音立たぬかも。さくくしろ、聲無き宮居。玉だれの、小瓶を据ゑて。五十鈴川、中にを置きて。神の夜の、神の夜宮。鈿女子が、舞する小袖。手火の火の、燃ゆるを見れば。翻す、五色衣。色冴えて、萌ゆるを見れば。葦牙の、其の一つはも。玉の緒の、玉をし結び。二つはも、光りをし呑み。三つはしも、みもひをば汲み。四つはもよ、夜見戸の風の。吹くからに、世世をこそ知れ。五つはも、何時も常世と。澄み澄みて、澄みにぞ澄める。六つの火は、黄泉津ことさか。事さかの、雄柱一つ。くすしかも。あやしきかもな。禍津毘の、禍のことごと。群れ集ふ、醜女ことごと。神の火に、祓へこそやれ。行く水に、却へこそすれ。

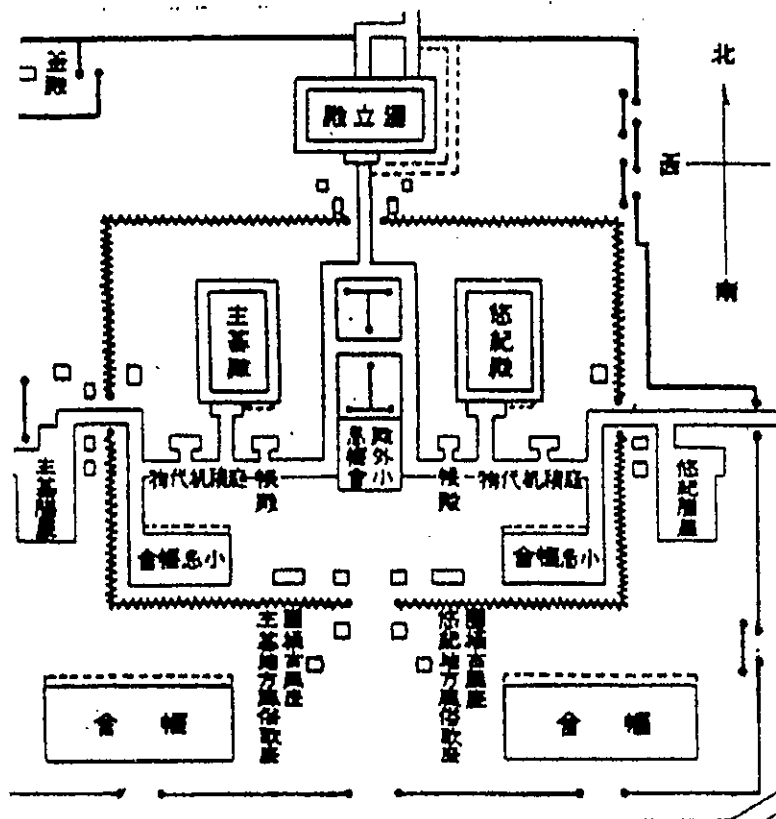
風薫る、奈良山越えて。今日今日と、何時か來にけり。伊勢の神みや。

そのやうにして、天窓戸は開くるので、神まゐりの有りがたさが、つくづく身にしみて、感慨無量なのである。

ひるがほの、はなさくからの、ひろのらの、つきまつほどの、うたたぬし。その。

皇大神宮(内宮)御垣内平面図

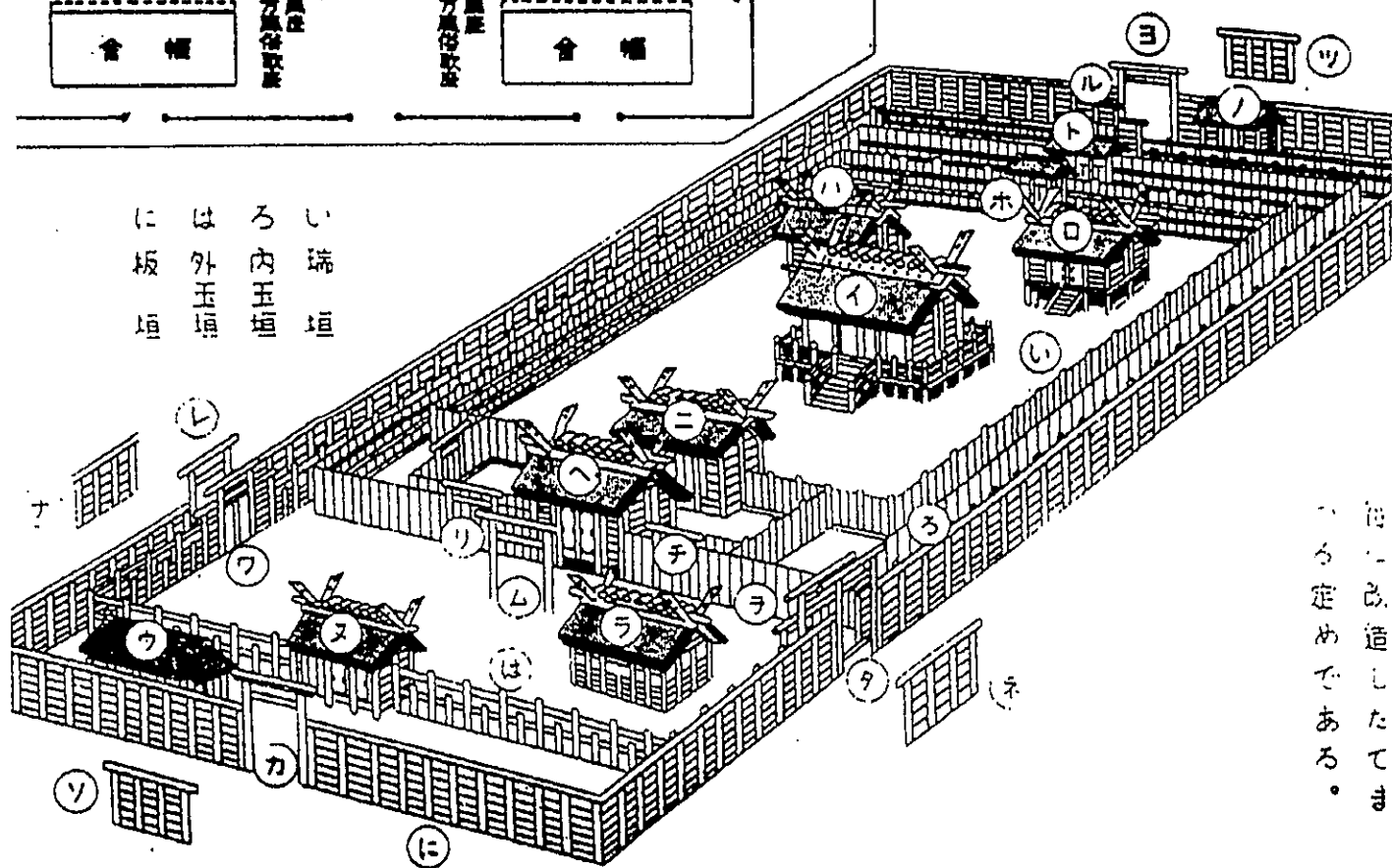




大嘗宮の正面と平面圖

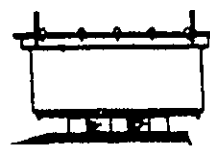
イ	正	殿
ロ	東	殿
ハ	西	殿
ニ	瑞	南
ホ	瑞	北
ヘ	内	玉
ト	内	玉
チ	東	御
リ	西	御
ヌ	外	玉
ル	外	玉
ヲ	外	玉

カ	板	垣	南
ヨ	板	垣	北
タ	板	垣	東
レ	板	垣	西
ソ	南	御	
ツ	北	御	
ネ	東	御	
ナ	西	御	
ラ	中	御	
ム	南	御	
ウ	北	御	
ノ	東	御	



い 端 垣
ろ 内 玉 垣
は 外 玉 垣
に 板 垣

此の如く造したてま
へる定めである。



天昭



大神宮



力三は楚絶中書本あるが故に 人天万類皆集之を信仰し
然れども然るが故に之を和するなり

昭和十六年

修契大講當録

昭和廿一年三月

古典傳習所 修禊同人 木原崇喬氏 逝去せらる 仍

之を

奉齋

甚しむため

此の書も

木原崇喬筆録
生尾一哲筆録

人天に流す也

言霊の幸

日本神道・禊の教典

多田雄三

小引

昭和九年五月七日、父を喪^{ウシナ}ひし時、齋^{マツリ}廷^{ノリト}の祕事を得たり。之を、「死生觀」として、刊行したるは、祖神垂示の神傳を明にし、祓禊^{ミソギ}の結果を知らしめ、併せて、父を紀念せんと願へるなり。

然れども、神事^{カミ}の教ふところは、一圓光明^{ヒノクニ}の零界に於ける、生滅起伏なれば、人間生活に繫縛せられては、時として、「有^{リテ}目而不^レ睹、有^{リテ}耳而不^レ聽、有^{リテ}鼻舌而不^レ分^タ香味^ヲ、備^{リテ}身意而不^レ辨^ル觸法^ヲ」にも似たる憾有らんか。

昨年十月十七日、旅中にして、祖神垂示^{アマテラスヒノミコノカミノ}の神嘗祭儀^{ミノリ}を遙拜す。傳へ聞く。神嘗^{カミノミアエ}は、御身^{イザナギノオホミカミノオホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}なりと。御身^{オホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}とは、三貴子御生誕^{ミハシラノウツノミコアレマシノミノリ}の神儀なることを、古典は明記したり。然れども、神嘗祭儀^{カミノミアエ}が、御身^{オホミマノハラヘ}の禊禊^{ミソギ}なることを、明記したる典籍有るを聞かず。寡聞なるが爲か。或は、史、之を缺けるものか。舊記、古典は、文書に過ぎざるが故に、神儀行事を記すこと容易にあらず。神儀行事は、神より神に傳ふるにあらずれば、完全なる傳統にあらずるべし。蓋、人にして、此の事に關與するは、僅に、直日^{ナホヒ}の發^{ヒラ}くに依るのみなりと。

祓禊^{ミソギ}を語ることの難きは、如此なり。然れども、語らざれば、發^{ヒラ}け難く、記さざれば、傳へ難し。

曩に、滿洲帝國皇帝は、國本奠定の詔書を發し、滿洲國家の進退は、日本天皇の、惟神の大道に依るべしと命

ぜらる。於此か、滿洲帝國協和會は、康德七年八月初旬、新京特別市に於て、建國大學を會場とし、惟神の大道を明にせんとして、祓禊ハラヘミツギの神事を行ず。會するもの七十有二人。内に、興亞塾主事、木原崇喬、生尾一哲の兩氏在り。共に、大道を求むるの心深く、日神事ミソギを行ずること、他と等しからず。於此か、一夕、予、「死生觀」を講ず。兩氏、刻苦精勵、筆録して一書を成す。乃、「豫母都志許賣」ヨモツシコメと名づけ、江湖に貽る。

大海の一波、また、之、潮ならざることなし。記して以つて、來者を待つ。

眉白き、翁ぞ獨、庵守る。道問ふ人の、何時か來ると。

以上 昭和十六年三月十一日 東京鷺宮に在りて

山谷識之

第一章 死生觀

『 』の中に收めたのは、原本のノリトである)

『死生觀 完』

「さくはなの、いろかたづねて、ひとぞよる。ながめはるけき、やまをめぐりて」

あとがき

日本神道・禊の教典「言靈の幸」發刊に際して

多田雄三先生は號を山谷と稱され、又いちじ岸生とも申されたことがあります。

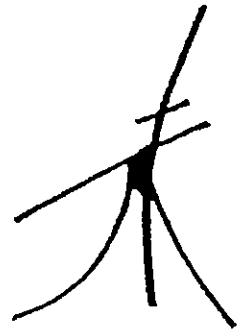
先生は千葉縣君津郡袖ヶ浦町神納に明治十六年十二月二十一日出生されました。本業は日本畫家でしたが、川面凡兒翁（近代日本禊の創始者・稜威會創立・文久二年―昭和四年）の門に入られ禊の修行をなさいました。そして凡兒翁の高弟として、翁に従つて各所の禊に参加なされました。

翁の没後東京中野區鷺宮に籠居して日本神道を研究され、遂に新境地を開拓されました。そして戦時中は舊満州國機關の招聘に應じて禊の指導をなされ、戦後は郷里に引揚げられて、昭和三十二年八月五日永眠されました。享年七十四。

さて日本神道と申しますよりは日本古典、特に神代紀が正確に解釋されたことは日本歴史上にないのであります。

それがため日本神道は曲解誤解され、特に戦後は侵略思想の代名詞の如くに言はれました。

しかし日本神道は決してそのような危険思想ではなく、極めて穩健妥當、ひとり日本人ばかりではなく、全世界人類がよつてもつて標識基準とする思想なのであります。



日本神道・禊の教典

多田雄三

多田雄三著 「未来」

未来

昭和二十一年十二月六日

東京都中野区鷺宮二丁目八八九番地

多田雄三

後に

千葉県君津郡昭和町神納三千五百九十五番地 ニウツル

(註 昭和五十八年現在 同郡袖浦町福主台一丁目八番三号)

古典研究會趣意書

大道行ハレザル荆棘生ズ。

現在世界ノ信仰狀態ハ如何ニ。

信仰ハ自由ナリト思ヘル人類ハ許多ノ信仰樣式ヲ
行ジツ其ノ歸結スルトコロヲ知ラザルニ似タリ。

古來各國各民族ハ幾多ノ信仰樣式ヲ行ジツモ常
ニ其ノ統一ニ歸結スルトコロヲ求メツアルナリ。

然レトモ中古各國境ヲ隔テテ獨自國ノ内ニミ踞躋
シ遂ニ過ツテ内外融會ノ活路ヲ失ヒ自國ノ古典ガ他ト
關聯スルトコロヲ知ラズ自他同歸ノ信仰ヲ忘レタル
ナリ。

祖神垂示ノ大道ハ自他ヲ忘レズ内外ヲ隔テズ昭昭ト

シテ六合ヲ照レ晃晃トシテ宇宙ヲ貫ク。

疑フコト勿レ。古傳ハ炳乎トシテ典籍ニ存リ。天降・再臨・再生・降臨・涅槃・解脱・算ハ來レバ之レ皆生死ナラザルノ生死ニシテ宇宙築成ノ事理ナルナリ。

宇宙本來宇宙ニテス。宇宙ニテスガハ宇宙トハ極大ニシテ極小ニシテ日本ノ古典ニハ火ト傳ヘ經ト教ヘ身ト知ラシテ明瞭ニ記載シタリ。喪ト云ヒ葬ト書シ畏ト描キ神ト作リタルハ支那民族ノ傳フルトコロ。焰魔天ト教ヘ及ぼハト示シタルハ印度人ト猶太民族トノ傳承スルトヨリ。

人類ノ年曆ハ茫茫トシテ幾千萬年ナルヤヲ知ラズ。古傳ノ多クハ忘失セラレテ今ニ存スルモ甚

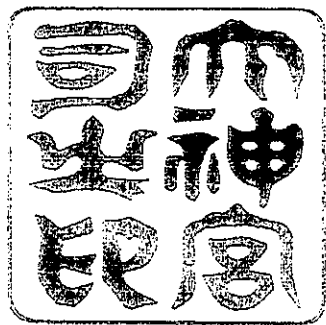
乏シク錯綜紛糾シテ窺ヒ知ルコトヲ容易クセス。此ノ故
ニ誤解謬見頻ニ出テテ學者ノ迷蒙愈甚シキモ
ナリ。今ニシテ之レガ闡明ニ努メズンバ人類ハ
遂ニ天界築成ノ神儀ヲ失フニ到ラン。
一念之ヲ想ヘバ古典ノ研究ヲ完成シ内外自他ノ信
仰統一ヲ圖ラサルコト能ハズ。茲ニ古典研究會ヲ
設ケテ相互ニ疑義ヲ質シツツ相互ニ完全ニ了得
シ更ニ進ミテ世界人類平和嘉悦ノ聯邦樂土
ヲ現成センコトヲ期ス。

以上

昭和十年十一月三十日

大日本後援所同人 敬具

天照大神宮



1901 神宮大麻

参考：神社本庁発行「神宮大麻」

神宮大麻・暦の頒布にたずさわる上での参考となる事項をまとめさせていただきました。この葉を手になされ、皆様の頒布奉仕が円滑に進むことを願っております。 神社本庁

[神宮大麻ジツグウイマ]

…… 大御神さまの御蔭をいただいて ……

<神宮とは>

伊勢の神宮は、天照皇大御神アマテラスオホミカミさまをおまつりする皇大神宮コウダイジングウ（内宮ナイクウ）と豊受大御神トヨウケオホミカミさまをおまつりする豊受大神宮トヨウケダイジングウ（外宮ゲクウ）の両正宮を中心に、別宮ベツグウ・摂社セツシャ・末社マツシャ・所管社ショカンシャ合わせて百二十五のお社からなり、皇室の御祖神ミヤガミ、日本人の総氏神さまとして尊ばれ、広く国民に親しまれています。

天照皇大御神さまはこの日本を国生みされた、伊弉諾尊イザノミコト、伊弉冉尊イザナミコトの最もうるわしい御子神ミコガミで、その御光はあまねく世界を照らし、万物の生成に欠くことのできない太陽のように、最も素晴らしい御存在として敬われてきました。

皇大神宮は第十一代垂仁ミコノ天皇二十六年（西暦紀元前四年）に伊勢の五十鈴の川上に、また豊受大神宮は第二十一代雄略ユリヤク天皇二十二年（西暦四七八年）に度会ワタライの山田の地にそれぞれお鎮まりになったと伝えられています。

皇大神宮の由緒は、天照皇大御神さまが皇孫ミマ（大御神の御孫）である瓊瓊杵尊ニギハヒトをこの国にお降しになる（天孫降臨テンソクコリン）にあたり、皇位と国家の永遠の繁栄を祝って、八咫鏡ヤリガミと八坂瓊勾玉ヤカノマガタマと天叢雲剣アマノムラギノツルギ（草薙剣クサガリノツルギ）— 三種の神器 — を瓊瓊杵尊にお授けになり、皇室を中心とした国づくりの基礎を定められたことに始まります。以来、八咫鏡は、大御神さまの御神勅（お言葉）により、天照皇大御神の御霊代ミタマシロとして、歴代の天皇が皇居内でお側近くにおまつりしてこられました。

第十代崇神ソウシン天皇の御代、天皇はその御神威を畏み、神鏡（八咫鏡）を皇居内から大和国の笠縫邑カサヌメウにお遷りしになられ、皇居内には神鏡を模した新たな御鏡をおまつりしました。そして第十一代垂仁天皇の御代、皇女倭姫命ヤマトヒメミコトは神鏡を奉じ、天照皇大御神の永遠の宮地ミヤトコロを求めて国々を巡られ、現在の伊勢の地に宮地をお定めになったと伝えられています。

神宮では日々天皇陛下の大御心オホミココロのもと、皇室の平安と共に国家の繁栄や国民の幸福を祈るおまつりが営まれています。中でも、その年の新穀を大御神さまに奉る十月の神嘗祭カメハツメ、六月・十二月の月次祭ツキメシイは三節祭サセツメツメと言われ、特に大切なおまつりです。また二十年に一度、神宮の御正殿をはじめ諸殿舎、及び御装束・神宝を新しく作り替え、大御神さまにお遷りいただく式年遷宮が執り行われます。この遷宮祭は千三百年の伝統があり、平成五年には第六十一回式年遷宮が執り行われました。

<神宮大麻ジツグウイマとは>

神宮大麻の「大麻」とは、本来「おおぬさ」と読み、「ぬさ」とは、神々への捧げ物、お祓いの際に用いられる木綿功、麻などのことです。今日でも神社で使われるお祓いの用具を「大麻材サ」と言います。そこから、厳重なお祓いを経て授けられるお神札ヲを「大麻イマ」と呼ぶようになったと言われています。

平安時代の半ばには、多くの人々が神宮にお参りするようになり、平安時代の末期になると、神宮と全国の崇敬者との間を取り持つ、御師オウシと言われる人々が登場しました。

御師は神宮に奉仕する神職でありましたが、全国から多くの崇敬者の真心を受け入れ、参宮の案内や自邸の神楽殿での神楽や祈禱を司ツツタったのでした。さらに、全国津々浦々に赴いて祈禱を行い、伊勢参宮へ人々を導き、神宮の御神徳を各地に広めていったのです。このとき、崇敬者のために御師がお祓いし、祈禱をこめて頒布した「御祓大麻カライイマサ」が現在の神宮大麻の起源といわれます。これらの御師の活動により、江戸時代後期の安永年間には、全国世帯の約九割が大麻を受けていたとの記録もあります。

明治四年の神宮制度の改革を受けて、同五年より、神宮大麻は神宮から直接頒布されることになりました。これは、明治天皇の「朝夕に皇大御神の大前を慎み敬い拝むための大御霊オホミシルシとして神宮大麻を国民全戸に漏れおつることなく奉斎せしめよ」との大御心のもとに、国民があまねく大御神さまの廣大無辺の大御光をいただくための大麻頒布制度の改革でありました。

その後数度の変遷を経て、神宮大麻は、神宮神部署から各府県の神職会を通じて頒布されるようになりました。昭和二十年の終戦により翌年、神宮をはじめ全国の神社は一宗教法人となりました。そこで全国神社関係者の総意により、直ちに神宮を本宗と仰ぐ神社本庁が設立されました。これに伴い、神社本庁は神宮司庁から神宮大麻・暦の頒布を全面委託いただき、全国約八万の神社の神職・総代等によって、各家庭に頒布されるようになったのです。

〈神宮暦とは〉

神宮暦には、神宮大暦（大暦ダイレイ）と神宮暦（小暦ショウレイ）があります。お神札を全国各地に配布していた伊勢の御師が土産として持参したのが神宮暦の元となる「伊勢暦（伊勢ゴヨミ）」で、人々が一年の正確な周期を知る上で古くからこの暦は大変重宝がられました。明治以後神宮より発行することとなり、今日もその伝統と文化的価値は連綿として引き継がれ親しまれています。

この神宮大暦は、科学的データを基礎として作られており、天体・気象の詳細な値を始めとして、全国各地の神社の例祭日等も記載しており、その情報量は今日でも類をみません。また神宮暦は、天体及び気象の身近な情報や新たな農事情報を加えたもので、農林漁業関係者を始め近年では家庭菜園やガーデニング等にも広く活用されています。

〈お神札のまつり方〉

神棚は明るく清らかなところで、目の高さよりは少し上におまつりします。お神札が南か東に向くのが一般的ですが、間取りによってはおまつりするのにふさわしい明るい清らかな場所であれば良いでしょう。

神棚がない家庭では、タンスや書棚の上に白い紙を敷き、おまつりするのも良いでしょう。そしてなるべく早いうちに神棚におまつりしましょう。

△お供え

神棚には、榊などの常緑樹をお飾りし、お米、お塩、お水などをお供えして拝礼します。

御神酒、季節の初物、お土産等は、その都度お供えし、感謝をこめてのちほど頂戴します。

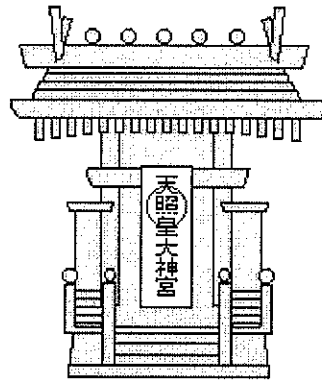
△お参りの作法

神社の参拝作法と同様です。

二拝（深くお辞儀を二回）

二拍手（手を二回打つ）

一拝（深くお辞儀を一回）

[戻る](#)**【神宮大麻】**

その伊勢の神宮のお神札を神宮大麻(じんぐうたいま)といいます。大麻とは、古くは「おおぬさ」と読み、祈りがこめられるお神札の大切な部分(麻串・ぬさくし)に由来する歴史のある言葉です。

また昔から、「お伊勢さん」「お祓(はら)いさん」とも呼ばれています。「天照皇大神宮」の神号に神さまの印と大神宮司の印が押され、清浄を第一に数々のお祭りを経て伊勢の神宮で奉製されています。毎年暮に全国の氏神さまを通じて各家庭に配られる神宮大麻は、氏神さまや他の崇敬する神社のお神札と共に神棚にお祀りします。

神宮大麻の起源は、平安時代末期にまでさかのぼり、御師(おんし)・大夫(たゆう)と言われる人々が全国の崇敬者に、「御祓大麻(おはらいおおぬさ)」「御祓いさん」などの名称で頒布していたお神札に求めることができます。

御師は神宮に奉仕する神職であると同時に、全国から多くの崇敬者の真心を受け入れ、参宮の案内や自邸の神楽殿での神楽や祈禱を行っていました。この御師が、崇敬者のためにお祓いし、祈禱をこめて全国に頒布した「御祓大麻」が現在の神宮大麻の起源です。御師の活動により、江戸時代後期の安永年間には、全国世帯の約九割が大麻を受けていたという記録もあります。

明治維新に伴う制度改革により、明治五年より神宮大麻は、神宮司庁により奉製頒布されることになりました。明治天皇の大御心(おおみこころ)のもと、国の隆昌や国民の平安を祈り上げた「神宮大麻」が、神宮の大御璽(おおみしるし)として、全国の家々に頒布されることとなったのです。

その後数度の変遷を経て、現在神宮大麻は、昭和21年に設立された神社本庁が神宮司庁から全面委託を受け、全国約八万の神社の神職・総代等によって各家庭に頒布されています。

[戻る](#)

神道の神々

神道には、多くの神々が存在しています。この様子を一口に表現した言葉が「八百万神^{ヤマトノカミ}」なのです。つまり、わが国は至る処に神が遍満^{ハマン}している国であることを神道は教示しているのです。では今日、どのような神々が祀られ人々の尊崇を集めているのでしょうか。

「八百万神」の中にあって最も尊崇を受け、わが国の神々の中心的存在として祀られている大神が「天照大神^{アマテラスオホミカミ}」です。『日本書紀』の「天孫降臨^{テンソンコウリン}神話」によりますと天照大神は、孫に当たる天津日高日子番能邇邇藝命^{アマヒタカヒコノフネニニギノミコト}に「豊葦原^{トヨアシハラ}の千五百秋^{チイソホアキ}の瑞穂^{ミズホ}の国は、是れ吾が子孫^{ミコ}の王^{ミコ}たるべき地なり。宜しく爾^ニ皇孫^{ミマ}スミマ、就^ユきて治^シらせ。行矣^{イタマヒ}、宝祚^{アマツツギ}の隆^{タカ}えまさむこと、當^{マサ}に天壤^{アマツ}と窮^{キウ}まり無かるべし」との神勅を授け、三種の神器^{ジンギ}を与えて、日本の王^ミとして天降^{アマダ}りさせたと述べられています。現在、天照大神（伊勢神宮では、天照坐皇大御神^{アマテラサスメミマミカミ}と称している）は、皇祖神として、日本の祖神として、日本各地に祀られている神々の総氏神^{ソウジノカミ}として、国民の大御親神^{オホミヤノカミ}として、伊勢神宮の内宮^{ウチノミヤ}（皇大神宮^{スメミマミヤ}）に鎮座^{チンザ}しています。故、大御親神として毎年家庭の神棚に祀る神札^{シンザ}には、神宮の大麻^{オホアサ}が氏神の神札と併せて頒布（年間900万枚）されているのです（全国神社で頒布される大麻は、頒布^{ハンブ}大麻^{オホアサ}と称します）。

百科事典を開けば、そこには天皇の敬称けいしょうとある。直接的に「天皇」と呼ぶことをはばかるおそきに使う名称めいしょうだという。

文字の意味として、「陛下」の「陛」とは宮殿に続く階段のこと。よって「陛下」とは、階段の下にいる者という意味になる。

しかし、これは変である。天皇は宮殿のなかにいるもの。階段の下の方ではないはず。「陛下」ならわかるが、「陛下」とは納得しがたい。

これに対し、有識者ゆうしきしやはいう。天皇に対しては、近臣きんしんの取次ぎを経て、上聞じやうもんに達する。この情景を比喩ひよに使うことで、權威けんいを表現した。それが「陛下」であり、「天皇陛下」という敬称である、と。

なるほどと納得してしまうが、はたしてそうなのか。こうした天皇のかかわる言葉は、みな神道用語である。神道によって説明されるべきものである。

神道における「陛」、すなわち階段とは何か――。

そう、ほかでもない。先にみた高天原と葦原中国をつなぐ梯子、「天の浮橋」であり、「天の橋立」である。

よって、「陛下」とは、「天の浮橋の下にいる者」の意味だ。

しかし――だとすると、今度は不可解ふかかいなことになる。天皇に取り次ぎをするのは神々であり、

ヒ
零の神直
日ヒ
零の神と
しての扱へ⇒ 櫛の雄柱
一つ欠の
大神事

瑞垣

タ
魂の神タ
(魂の神と)
しての扱へ↑伊
邪
那
美
命
の
ま
す⇒ 八柱雷
の秘事

玉垣

ミ
身の神↑天
若
比
古
の
死⇒ 高木神の
天返矢の
神事↑猿
田
毘
古
神
の
導き

中垣

ミタ
身魂の神人
間
的↑頭ウ
身ツ
魂ミ
の
分
際↑神カ
習
ひ
習ふ

荒垣

ヒト
人の神↓人間世界
の
ミタマツリ

(327 頁後半)

天照大御神の
天河原アノカハラ

天 (やど) → 宮ミヤ
代り目 → 秘ヒメ
通い道 → 天浮橋
アノウキハシ

我と尊くもの

須佐之男大神の
須賀宮スガノミヤ

大国主神が
天詔琴アメノリゴトを
かきなし給ふ処

その我とは

八雲立つ
三雲の国の秘宮ヒメミヤ



(323 頁 7 行目他)

「零の神」

(323 頁)

隠身カクリミの神
純男ヲノカギリ神聖カミ
天祖アメノミオヤ
天津神アマトツカミ

瑞垣

第一階層

(魂の神としての国土)

「魂の神」

玉垣

第二階層

(身の神としての国土)

「身の神」

中垣

第三階層

(身魂の神としての国土)

「身魂の神」

荒垣

第四階層

(人の国)

(326 頁末)

「人の神」 = 「完成された日止」

奇身魂
直日

① 零の神の多くは必要に応じて 身魂をまとい、宇宙に降りて魂の神としても活動するので、同じ神名でも区別を要す

(326 頁末 ~ 327 頁初)

無宇宙

1 次第次第に
精より粗に転化
2
3 単純より複雑に
組み直される

第四階層

祖神

多田山公秘稿

常陸風土記に「祖神尊」とあり。

今時の學者中には、祖國と並べて祖神と云つてあるのは祖先の國と祖先の神と云ふが如くでもある。

歴史的には、祖先の國と云へば民族として建設し經營したのであり、祖神とは民族として當初奉祀信仰した神を指すのである。

けれども、それは私有したる神と云ふに等しいから偏執固陋の見であり、荊棘細徑、大道を没却せるものである。

日本の古典には、伊耶那岐命・伊耶那美命・二柱神・天祖天護日天狹霧國禪日國狹霧尊・天祖・陰陽・天地・天津神國津神・天神諸命・尊・天饒饒國饒饒天忍穗耳命・天津神籙天津磐境・高天原千木高知底津磐根宮柱太敷坐・修理固成・等と記載し、現今使用の言語としては目・女・

陰・凹・芽・等が存つて「ミオヤノカミ」の義を傳へて居る。茲に云はんとする祖神とは、「ミオヤノカミ」なる日本語に充當したのである。

「ミオヤノカミ」とは、身・實・稔・充實・三・産出・産靈・胎兒・にして神魔同凡の體なり用なるのであるから、日止であり火人であり人であるのである。

日本書紀に「天地未生之時。譬猶海上浮雪無所根係。其中生一物。如葦牙之初生堦中也。便化爲人號國常立尊」と記したる「人」とは則「女・陰・凹」で「支那人の傳へたる「フ・二・經・最小」なのである。

之れを象形的に指示したのが「人」の字で、之れは人身相續の象徴なので、陰陽合体の義である。

「ミナノガハ」「ミナセガハ」の語が有つて現今も地名とされて居る。

水無瀬川・女男川・の如きがそれである。

水でない水・河でない河・水無野川・美那能賀和・女陰・母胎・高天原と傳へて「アマノカハ」「アマノカハラ」「アマン

ハ」「アマンカハラ」「アマンカハラ」な「ヤスノカハラ」などと傳へて「タカマノハラ」で白玉光底泉聲潺湲とは「アマンカハラ」の「カミカカリ」で、「あちめあうを」と傳へてある。

「アマノカハラ」とは天照大御神の鎮坐するところであることを古事記に「爾其矢（かれそのやは）。自雉胸通而（きぎしのむねをとほりて）。逆射上逮坐天安河之河原天照大御神高木神之御所（さかしまにいあげたれば、あまのかはらにまします、あまてらすおほみかみ、たかきのかみのみもとにいたりたり）」とあるが如く、天照大御神の國土で高天原であるから「賜天照大御神而詔之。汝命者所知高天原」と古事記に載せたのと對照すれば「タカマノハラ」が「天安河（アマノヤスカハ）」で天照大御神の統治したまふところであることは明瞭で「メ・陰・女・陽・芽・目・凹・孔・穴」で「天照皇太御神」と称へまつる「宇・宇・宇・宇・宇・斗・宇斗・宇」で母胎で天安河・天河原・皇土・白玉・天漢・天津磐境・太速邇等と傳へてある。

古事記に「爾天神之命以（かれあまつかみのみこともちて）。布斗麻邇爾ト相而詔之（ふとまににうらへて、みことのりしたまはく）。因女先言而不良（をみなさちだちしによりて、ふさはざりしなり）。」とある。

ここに「天神之命（あまつかみのみこと）」とあるので天神の神勅と云ふ意味だが、天津神之命であるから國津神ではない。國津神とは尊なので宇宙の主である。

之れを基督とは西部亞細亞地方の傳へで、日本にては「神人・神聖・人・伊耶那岐命伊耶那美命二柱神・日本天皇」にてましますから、天照大御神とは稱へまつらずして等しく大日靈貴尊と曰しまつるのである。

神にてましますけども其の御相を異にしたまふが故に御名もまた異なるのである。

秘文要約

多田 雄三

クニガラ

於此力。人ハ第一二人類トシテ他ノ萬類萬物ト區別セラルベキ風格ヲ具備セザルベカラズ。第二ニ民族トシテノ風格ヲ完備セザルベカラズ。第三ニ國民トシテノ風格ヲ發揮セザルベカラズ。第四ニ地方人トシテ都會人トシテ各異各別ナル獨立ノ風格ヲ存セザルベカラズ、郷土ニ在リテハ郷土ノ良風美俗ヲ作りテ郷土ノ神トナラザルベカラズ。家庭ニ在リテハ家庭ノ風格ヲ築キテ郷土ヨリ國家・民族・全人類ノ軌範ヲ示サザルベカラズ。一個人トシテハ人トシテ天ヨリ受ケタル天分ヲ完全ニ發揮發達セシメテ、天与神命ニ応ヘ奉ラザルベカラズトナス。

而シテ、家庭ヲ築キタル個人ハ単一ナル個人ニアラザルコト当然ナレバ、自己ヲ治ムルト共ニ家族ヲ治ムルノ大道ヲ行ジテ神命ヲ完フセザルベカラズ。之レヲ家庭統治ノ大道トナス。家庭統治ノ大道ハ必シモ國家統治ノ大道ト等シキモノニハアラズト雖、其ノ基準トスルトコロハ異ルコト無シ。

共ニ等シク天地陰陽ヲ剖判シテ一圓光明ノ皇土ヲ現ジタル『國常立尊』^{クニトコクテノミコト}ヲ仰ギテ中心トシ、其ノ中心タル國常立尊ノ神命ヲ奉ジテ一切ノ言論行為ヲ為スベキモノナリ。之レヲ高天原ノ神傳^{タカマノハラ カミノツタヘ}トシテ日本民族ノ傳承シ來レル神儀行事トナス。

其ノ神儀行事ハ古來複雑ナル傳ヘアルガ如クナリト雖、言^{コトバ}トシテハ、

あまてらすおほみかみ・あまてらすすめおほみかみ・あまてらしましますすめおほみかみ

ト教ヘラレタルヲ日本民族ノ久シク捧持シ來レルトコロトナス。

ああひがてんじんゆうあいこう

ト教ヘラレタルモ之ト等シキ神言^{カミコトタマ}ナリ。

相^{スカタ}トシテハ一圓光明體ニシテ古來○

ト書キタルヲ最簡明ナリトナス。此ノ

○ハ文字トシテ日本・支那・中央亞細

亞・東部歐羅巴等ニ教ヘ來リタレドモ、

年久シクシテ此ノ文ノ原義ヲ知ルモノ

乏シキニ到リタルハ慨嘆スベキナリ。

○ヲ日本民族ハひと讀ミひつきトモ云ヒひふみトモ呼ビあちめトモ稱シあまのみなかぬしのおほみかみたかみむすびのかみかむみむすびみおやのみことトモ白シ奉レル秘文^{ヒツミ}ナリ。

○ノ○ハ境地ヲ示シテ外廓ヲ教ヘ、ハ中心ヲ示シテ本體妙用ノ不一不二ナルコトヲ知ラシメ、合セテ○トナシタルモノハ中心ト外廓トノ位置ヲ知ラシムルト共ニ相互ニ干犯スベカラザルノ理ト、相離ルベカラズ悖ルベカラズ乱ルベカラズシテ本來本有ノ光明身^チアリ光明身ナラザルベカラズ光明身トサザルベカラザルモノナルガ、人トテ生レ來リシ責務ニシテ究極ノ目的リトノ義ヲ教ヘラレタルナリ。

大日本建國ノ精神ハ此處ニ存リ。

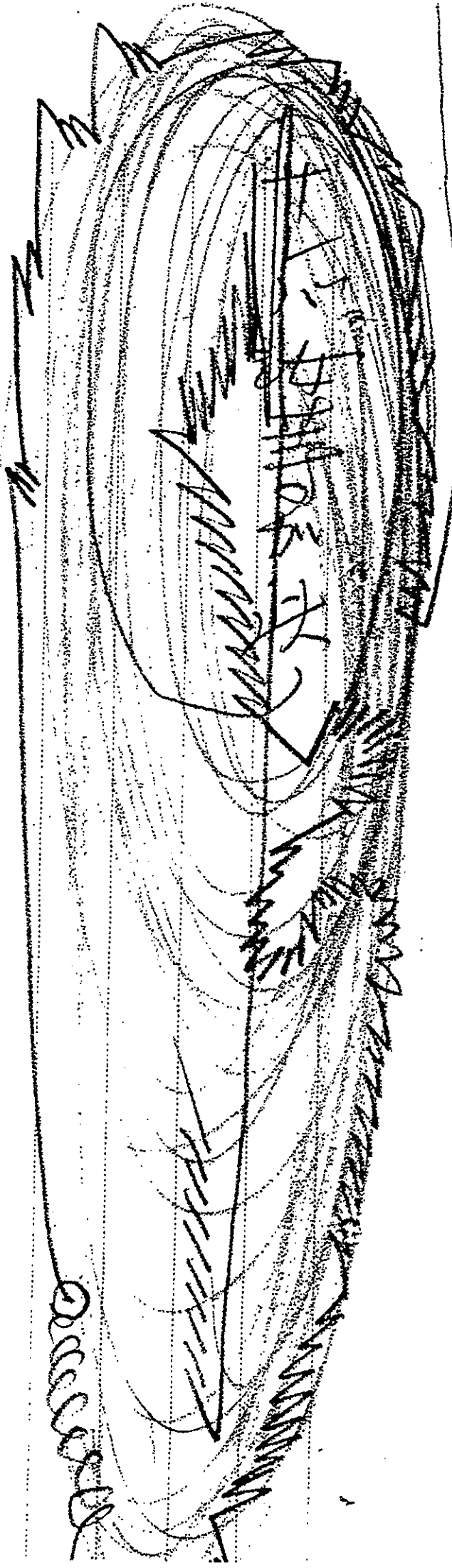
庭経営ノ根本方針モ自己修養ノ基準^{キジュン}他人教化ノ目標モ共ニ同ジク此處ニルナリ。

サレバ一言半句ト雖、此ノ目的基
ニ一致セント努メザルベカラズ。其
努力ヲ要セズシテオノズカラ自 此ノ大道ヲ
ニ顯シ得タル曉ニハひじりト呼ビテ
又那人ハ聖ナリト稱セリ。聖トハ神ノ
如クナリトノ意ニシテ日本民族が天皇
稱ヘマツルト等シキナリ。

日本天皇ハ直ニ神ニシテ神ノ如ク
リト云フガ如キ間隋有ル詞ニハアタ
ズト云フ人有ルヤモ知レズ。然リ。
ニ然リ。神ノ如クナルニハアラズシ
神ナルナリ。故ニ神聖ト熟字シテカ
ト訓マセクにとちたちのみことト白
マツルナリト古書ニハ記載シタリ。

十ノ月三日

ひ
ノ行方
トモナホサ
如毛
地
正
道
美人
玉



然^リ而^{シテ}

所以^也

勢^也

勢^也

ナ^ラシム^ル

利^也

念^也

勢^也

勢^也

勢^也

30

10

族禊

辛。今乃現爾。

留給

自今日

五。

五日。



五夜。

此度

乃具

取

留爾。

真清

水

中

天

乃水乎汲美。

諸有乃禍事

す。

族遣。

弗岐坐

五。

明魂。清魂

用過

去^{ニケル}カ^カ如^カ

高

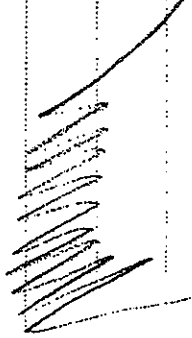
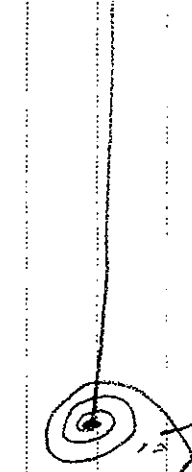
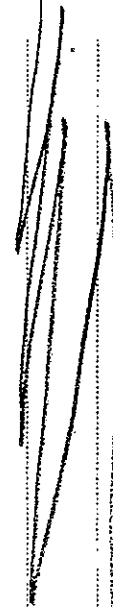
チ

無^カ

カ^カ

カ^カ

カ^カ



其

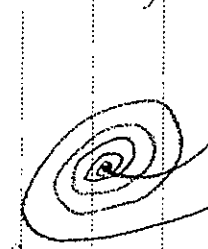
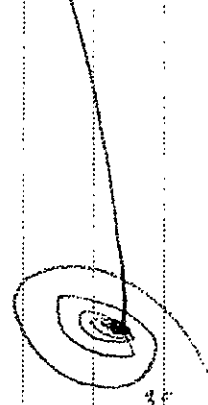
た

ま

し

ひ

り



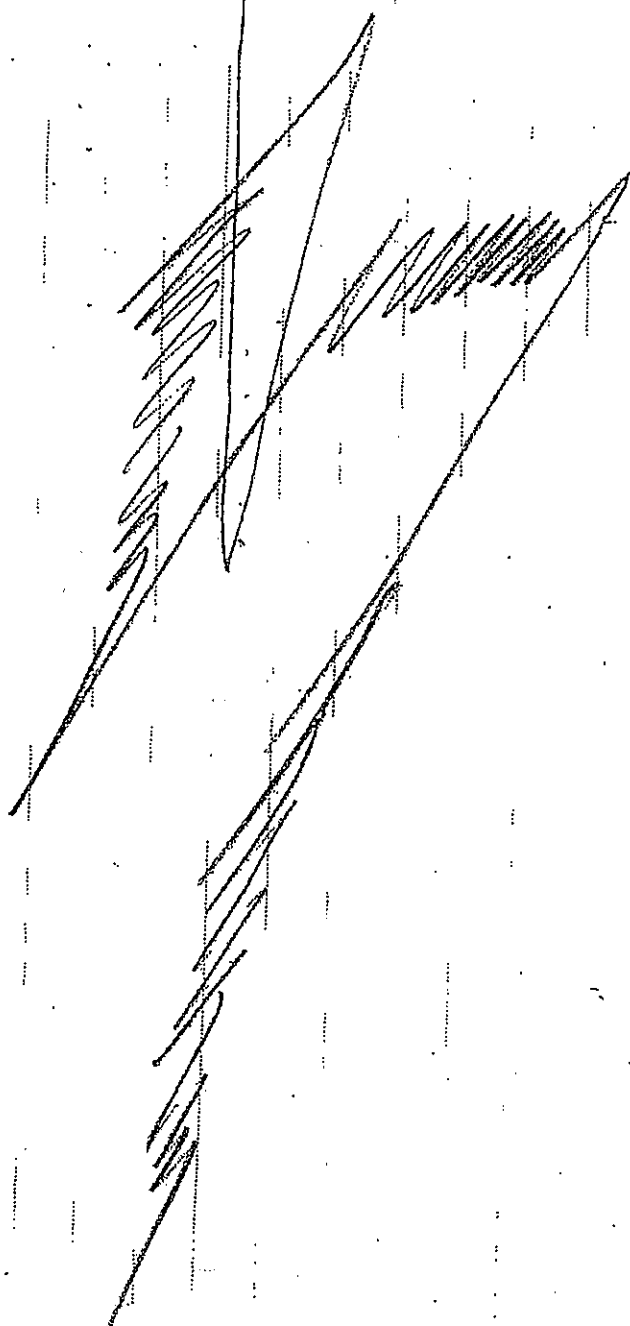
カ^カ

カ^カ

カ^カ

カ^カ

不



解

山

谷

古事記上卷 并せて序

臣安萬侶言す。夫れ、混元既に凝りて、氣象未だ效れず。名も無く爲も無し。誰れか其の形を知らむ。然れども、乾坤初めて分れて、參神造化の首と作り、陰陽斯に開けて、二靈群品の祖と爲りき。所以に、幽顯に出入して、日月目を洗ふに彰れ、海水に浮沈して、神祇身を滌ぐに呈れき。故、太素は杳冥なれども、本教に因りて土を孕み島を産みし時を識り、元始は綿邈なれども、先聖に頼りて神を生み人を立てし世を察りぬ。寔に知る、鏡を懸け珠を吐きて、百王相續し、劍を喫ひ蛇を切りて、萬神蕃息せしことを。安河に議りて天下を平け、小濱に論ひて國土を清めき。是を以ちて、番仁岐命、初めて高千嶺に降り、神倭天皇、秋津島に經歷したまひき。化熊川を出でて、天劍を高倉に獲、生尾徑を遮りて、大鳥吉野に導きき。儼を列ねて賊を攘ひ、歌を聞きて仇を伏はしめき。即ち、夢に覺りて神祇を敬ひたまひき。所以に賢后と稱す。烟を望みて黎元を撫でたまひき。今に聖帝と傳ふ。境を定め邦を開きて、近淡海に制め、姓を正し氏を撰びて、遠飛鳥に勅めたまひき。步驟各異に、文質同じか

ることと拜承しまつる。古事記の本文は、不幸にして、神傳を撰錄採摭された爲に、人間的作意が混淆て、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が、陰陽の兩儀と稱へまつらるる意味にての太極なる^{ヒノカミ}○で、即、^{マヅツ}⊙にてあらせらるることを曖昧にされたのは、何如にも殘念である。

どうも、古今の學者が、學に迷ひ、學に溺れて、事理を誤つた憾が多い。太安萬侶の如き、當代隨一の大學者であつたらうと思はるる人も、また其の一例である。「乾坤初分、參神作^シ造化之首^ヲ」と、上表文に記したのに始まつて、「次ぎに、次ぎに」と、神代の神の出生^{ウマ}れたかの如く書き綴つて居る。それも、始無く、終無き中の始であり終であることを明にするならば可いが、此の點が全く分つて居らぬ爲に、神代紀が、人間的神話と成つたので、讀む人に、「かみ」の實在を明確に把握さすことの出来なくされたのは、遺憾至極である。

「修理固成、天沼矛」とは、本來本有の神徳と稱すべきで、資料を整理して、完全圓滿の箇體を築き成すべき、用と體とに名づけられたので、資料整理の爲に、分解作用を司るのが「修理」で、「すり」と讀む。之は、神代の言靈である。「固成」は、「かためなす」で、造り上げるので、總合し統一するので、「天沼矛」は、修理固成の妙用を發揮するの主體で、其の内容は、

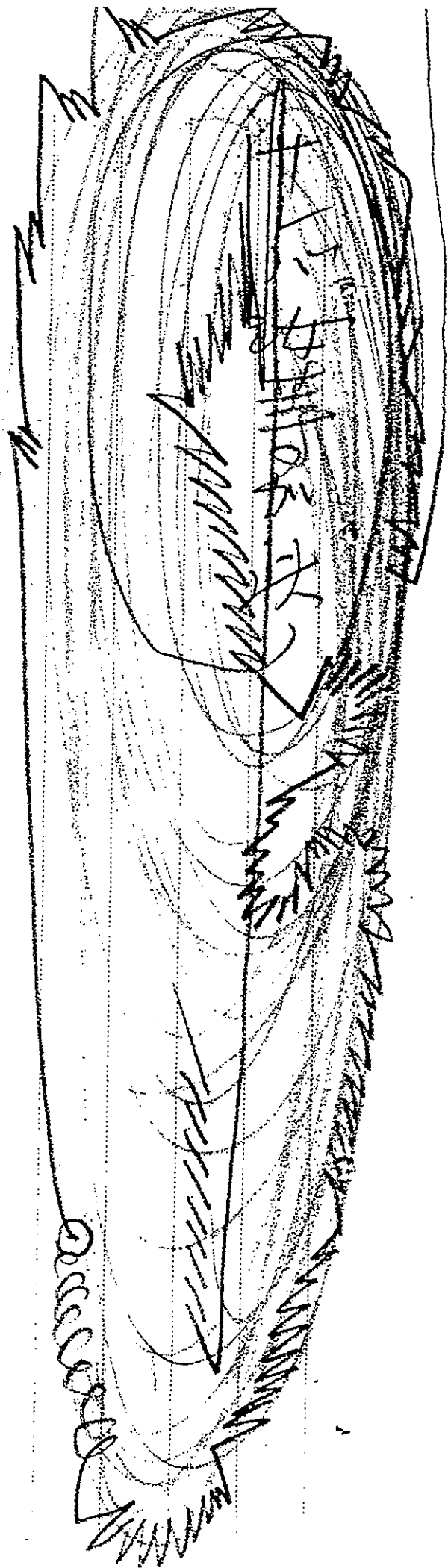
ソロヒテ ナラベテ イモリ サラニタ ネ チラサズ イリヒ オサメテ ココロ シヅメテ

○ ∞ ◎ ◎ ◎ ◎ ◎ 〆 ㊦ ・ ㊦ ◎ で、如此にし

て、修理固成の神業を完全に成し遂げらるるのである。それで、「天沼矛」と白しまつるは、祓禊の神器としての主神にてましまし、「修理固成」と詔りますは、祓禊の言靈としての司神にてまします。言も、コトバ相も、スガタ神代にカミノヨ在りては、總べて「かみ」にてあらせらるることは、繰り返して述べたので、神器としての「天沼矛」も、詔と

しての「修理固成」も、共に等しく神代の神であるが、此のことを、慥に體得するならば、神代卷は、自、解き得るのである。之を開くの鍵は唯一つの◎^ヒである。唯一つではあるが、其の光は、重重無盡であるから、之を仰

十の泡等が此



ひ
ノ行ラハ
トモナホサ
如毛
地

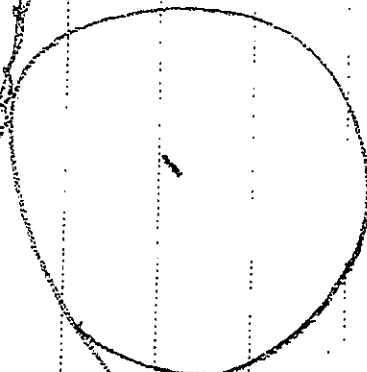
五
美
直
正

エウ
然
而
エ

所
以
也

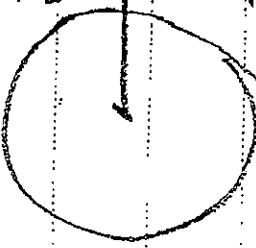
勢
勢

タ
ラ
レ
ム
カ



利
心

急
ル



41

大日本後禊所神祓宮宮域内規約

第一條

大日本後禊所八大日本神道ノ神傳ヲ

奉戴シテ神國樂園ヲ築成ス。

第二條

宮域内ヲ聖境ト成スガ爲ニ日夜間斷

無ク神儀祭事ヲ執行ス。

第三條

宮域内ニ住スル者ハ日夜間斷無ク神

言靈ヲ奉納スベシ。

第四條

神國樂園ヲ築クヲ目的トナスガ故ニ

各人各自ハ各人各自ニテ健全圓滿ノ身心ヲ築

成スベシ。

第五條

各人各自が健全圖譜ノ身心ヲ築クガ

爲ニ日神事ヲ授ク

。

第六條

日神事ヲ行ジ得タル時八月神事ヲ授

ケ逐次ニ火神事・伊邪那岐神事・高木神神

事・大日靈貴尊神事・八神神事・天祖神事・

大日本統一魂神神事・大湊別神儀ヲ授ク。

。

第七條

神事ヲ受ケタル者ハ神ノ宇氣比ノ通

通通通タル證左ヲ身ニ顯ハスモノトス。

。

第八條

神ノ宇氣比存ル人ヲ大日本後禊所語

部宮ノ主タル神直曰トナス。

。

部宮ノ主タル神直曰トナス。

。

第九條

神直日八神圀築成ヲ終生ノ任トナ

卜
共
二

神直回ヲ養育ス

第十條

神直日ハ神ノ宇氣此ニ依リテ其ノ子

第二字

氣田ヲ搜ク

第十一

宇氣毘フル者八終生師資ノ禮ヲ守

ラザルベカラズ。然ラザル時ハ高木神天返矢

ノ 神罰ヲ受ケザルベカラズ

第十二

高木神矢受々々ル者ハ今世

ニ
テ
神

直日タルコト能ハザルノミナラズ死後

卜
雞
日

老宮ニ入ルコト能ハズ

第十三條 死後ニ日若宮ニ入ルコト能ハサル

モノヲ調伏濟度救出攝入スルハ神直カミナホノミチ日ノ仕務

ナリト雖其ノ人々ニレテ現身ヲ正善美ナラシ

ムルコトナキ時ハ幾轉生ノ後ヲ待タサルベカ

ラズ。

第十四條 宮域内ニ任スルモノノ次序ハ神直カミナホ

日ノ定ムルトコロトス。

以上 昭和十年十一月一日

大日本後秩所神納宮宮域内規約

人は一人の人にあらす

多田山公秘稿

人の身は何れより来たり何れにか往く。

人は時に自己の生死起伏を思ひ見ざるべからず。

往く人の皆清かれと知るかぎり皆明かれと来る人の皆清かれと知るかぎり皆明かれと神ながら神の宇氣比て神の宇氣毘て神の教へて神輪赫灼く神の國ぞも神ながらなる。

自己の生死起伏を知らんと欲せば、神の宇氣比に依らざるべからず。

神の宇氣比は人の身としては知り難きところなれども、神人（かみのひと）は之れを信じて神業（かみのかみわざ）を建設す。

神人の神業を信ずる人には、神と人との宇氣毘の行はるるものなり。

人の身にて神を知ることとは、神人の神業を翼賛する時なれば其とは知らずして自（おのづから）、知り得たりとも称すべきなり。

ひふみよとひとこそまなべいむなやはここのたりてぞよはのまじはり。

神の言（ことば）は神ならでは知り難きところなれども、神人は之れを信じて神事（かみわざ）を行ずるなり。

神人の神事を信ずるものには神の教への行はるるものなれば神と神人（かみのひと）と人との三位一體たる事實の顯現（あらは）はるるなり。

ひとことのかつらぎぬしやかみまもるもりのさかきばとこよとこよも。

人間身として發音し得る神の言（ことば）は神人ならでは知ること能はざるなれども、之れを信ずる人は夢になりとも教へらるることの有るものなり。

言（ことば）にも相（すがた）にても夢になりとも知りたしと思はば「ヒクマノノシホクムヲミナトコヨニモキミキサメトヒクマノノ」と唱へつつ念じつつ正位に臥床すべし。

正位に臥床すとは安靜にして正念三昧なるを指すなり。

ふるのみややすのかはらにひとぞよるけふをばやかとかみのうけひてかみのうけびてかみのをしへてかみのしらしてかみのかみわぞてりにてりたるかまのまにまにかみながらなる。

人の身は何れより来り何れにか往く。

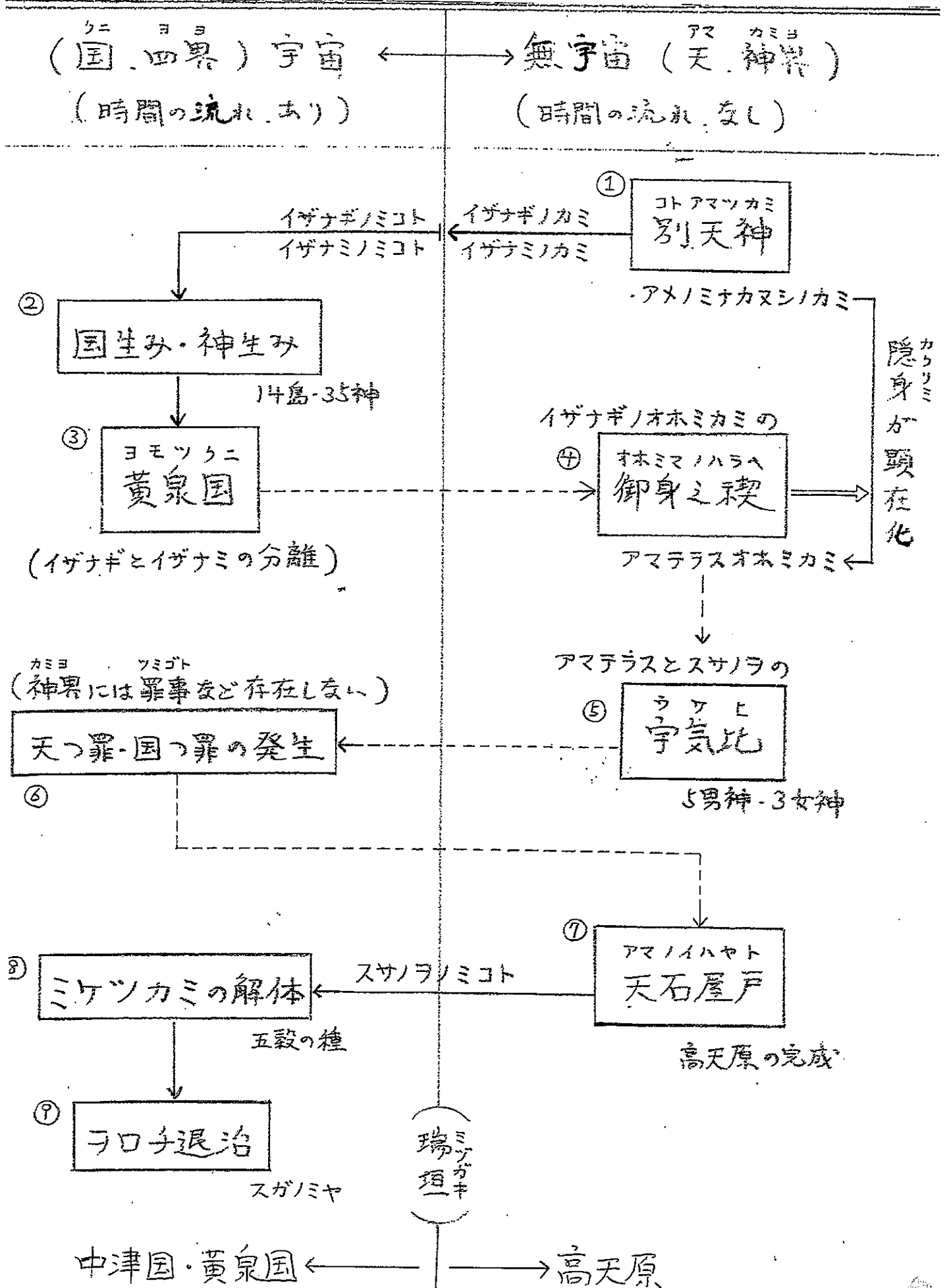
いつかまたやしまのはにはあ

日止（ひと）は火聚なればとて火人（ひと）とは名づけたる

火の結びたるを火人なり日止
なり人なりと教へ給ふと共に、
其の結晶堅固に統一したるを加
美（かみ）なりと教へられたる

大正の人道とは正誠正義にして神國を築成するの謂なり。

古事記神話の解説



神人感孚

多田山公

川面先生紀念事業會の御様子
拝承。

元來馬場愿治博士の如き川面
學を知らざる者が、川面先生亡
きあとを預るなど言語道斷の僭
越にして、稜威會を冒瀆し先師
の徳を穢すものに候。

靈を一（ヒ）とも三（ミ）と
も云ふぞと川面學は教へたれど
も、遺弟中唯一の道統受授者と
稱せらるる高橋止観も、嘗て其
の理を聞かず知らずと答へられ
たれば、遺弟一萬之れを知るも
のは無かるべし。

一にして三なりとは、祕事は
祕事なれども説き得ざるものに
はあらず、蓋、知らざりしが為
に説くこと能はざりしのみ。

一即三、三即一なりと云ふが
故に耳に入り難きのみ。

靈なる実体は不一にして不二
にして不三不四にして五なり。

之れを「カミ」と日本民族は
伝承し来れるなり。

古老は之れを図解して・① ②
とし「一二三」とも「日経身」
とも教へて中心と外廓との聚散
離合、生死遷流の大道を伝承す
る方便なるのみ。

「五」とは数なれども「イ」
とは言にして「生命（イ）」と
呼ぶ。

「イノチ」にして顕幽一貫と
の義なり。

「イノチ」とは元より死に對
する生にはあらず、神代の神の
神言靈に候。

神人感孚

多田山公

(一)

大凡十五種の舞を定め候はば
その舞と歌とにて

神を祭り

土地を清め

身魂を齋り

おのづから鎮魂行事を完成し得
るものに候。

天理教が現在の如き隆盛を致
したるは教師の説教の力にもあ
らず、治病行にもあらず、主と
して彼の教祖が捨身行の舞の結
果にして、天鈿女の神挂が常闇
の世を照したるは申すも畏し。
神祭る我が衣手に天地の

神こそ宿れ神のまにまに

神ながらなる。

彼の神楽と称するものは低劣
なれども、俚俗に入り易く、信
徒の多くは之れを楽しみに致し
居るものに候。

彼の如き低劣なる形式は採る

こと能はざれども、太古の拜神
行事が主として舞(マヒ)と歌
(ウタ)と神饌奉奠となりしに
鑑み、現代にも直き正しき美し
き形式の神舞を復興せざるべか
らず。

之れを成すものは必、盛大な
るべきことを小生は断言して憚
らざるものに候。

神子舞(ミコマヒ)の歌とは
神言(カミコトバ)にして、現
今云ふところのノリトの起原を
なすものに候へば、此のウタを
のみ間断無く唱へても神人と成
ることを得べく、身を清め、境
を浄め、家庭を和げ、郷國を治
め、天下を平安ならしむるの大
功德有るものに候。

幸魂神にして、奇魂神にして
八千矛神たるも、此の外にては
無きなるぞ。

あなかしこ。

柿の實は熟れて落ちたり

山茶花は咲きををりたり

我が庭に稲取り入れて

宴遊すべくも。

父母の亡き跡とへば廣野らに

秋の稔りの豊に多豊に。

昭和十四年十月三十一日
午前〇時〇分 鷲宮に在りて

山谷記之

(二)

川面先生紀念事業會の御様子
拝承。

元來馬場愿治博士の如き川面
学を知らざる者が、川面先生亡
きあとを預るなど言語道断の慥
越にして、稜威會を冒瀆し先師
の徳を穢すものに候。

靈を一(ヒ)とも三(ミ)と
も云ふぞと川面学は教へたれど
も、遺弟中唯一の道統受授者と
称せらるる高橋止観も、嘗て其
の理を聞かず知らずと答へられ
たれば、遺弟一萬之れを知るも
のは無かるべし。

一にして三なりとは、祕事は
祕事なれども説き得ざるものに
はあらず、蓋、知らざりしが為
に説くこと能はざりしのみ。

我之れを憐みて説示す。

一即三、三即一なりと云ふが

故に耳に入り難きのみ。

靈なる実体は不一にして不二
にして不三不四にして五なり。

之れを「カミ」と日本民族は
伝承し来れるなり。

古老は之れを図解して・〇〇
とし「一二三」とも「日経身」
とも教へて中心と外廓との聚散
離合、生死遷流の大道を伝承す
る方便なるのみ。

「五」とは数なれども「イ」
とは言にして「生命(イ)」と
呼ぶ。

「イノチ」にして頭幽一貫と
の義なり。

「イノチ」とは元より死に対
する生にはあらず、神代の神の
神言靈に候。

さみだれの はれまをまちて
かりいれし むぎこそよけれ
こがしつくらな。

むぎこがし はみつつまれば
さみだれの けぶれるなかを
つばくらめとぶ。

ちちとははと まきたるむぎの
いまうれて つゆのはれまを
こがねいろこぎ。

(三)

「人間の一言一語、その一言一語は、人間の分派霊、分派魂である。神の分派霊、分派魂である。故に、その言葉を称して『言霊』と云ひ『神霊』とまで信じたのであります。」(古典講義録第二号第六十一頁抜書)之れを翻訳すると「総べては霊であるから詞も勿論、霊である。霊である詞であつてみれば言霊と呼べるわけである。」果して然りや。

何も彼も、霊だ、魂だ、元子だ、原素だ、電子だ、光子だ、何故に事新しげに言霊と称するぞ。

蓋し、未開の土人が無智なるものの適ま、霊なるに気付きて驚異し、言霊の語有るに至れりとの意なるべし。

言霊とは果して然りや。否。

大に否。

隻手の声と禪家に云ふところは、蓋、言霊の一角にして、富

土山上の手とは川面神道の公案なり。

(四)

無始無終と云ふが果して実証有りや。

無始無終は時間であるが之れが静止の状態を見れば空間で、其の空間は無際無涯でなければならぬ。

無際無涯なるものには形なし。無朕無象、色も香も声も味も固より無し。故に無なり。

固より無中心、外廓も辺際も有ることなし。

果たして無始無終に発現し歸結する霊なるもの、霊出なるものの、三出なるもの、稜威なるものが宇宙なりや否や、果たして実証有りや否や。

無は極なり。

数理は之れを教へたり。

然れども其の無が如何なれば有なる萬有と発現するか。

過去も如是、将来も如是発現しつつ、帰結しつつありとは、空にあらざれば能はず。

空は即無なるべし。

無はどこまでも無であつて有とはならぬとは、計算である。けれども極は然らず。

始無く終も無ければ空であり無である。

空で無で、宇宙で、萬有で、時間で、空間で、色相で、然らば極が非か。

大宇宙は一か零か。

零にして一なるか。

零にして一なるは箇体なり。

箇体は生滅するが故に唯、其の位置のみ有りて広狭長短を論ぜず。

故に之れを零と呼び又一と称す。

大の極も一なるが如く、小の極も一にして、箇体も一にして箇体を構成するものも一にして彼れと此れとは各一にして一にはあらざるなり。

そんなことを考へずに、唯在るものを見て、造り得るものを造りつつ行くべきものであると□□□□と云ふ男は力説するのである。

川面凡児

(五)

昭和十四年十一月十七日
金曜日 曇

朝、斎藤一氏来たりしにより之れと約して麻布一本松の主を誘ひ、上野美術協会に日本人形展覧会を見る。

帰途、松坂屋に回教團展覧なるものを見て、四億の信仰を繋げる回々教とは如何なるものかを疑ふ。

偶像を拝せず、唯メジナを拝す。之れ偶像にあらずや。

日本政府にその人無きが故に之れ等宗教団の怖るべきことを知らざる如く傍観しつつあり。明日を知らざるものは危いかな。